虹猫と木精

宮原晃一郎

青空文庫

第一回の旅行をすまして、お家へ帰つた虹猫は、第二回の旅行にかゝりました。

或日、れいのとほり、仕度をして、ぶらりと家を出て、どことはなしに、やつて行きますと、とうとう木精の国に来てしまひました。木精といふやつは面白い、愉快な妖精で、人に害をするやうなこともなく、たゞ鳥のやうに木にすまつてゐるのです。けれども鳥とちがつて、飛ぶことはできないのです。もつとも、鳥とはだいの仲よしで、鳥の言葉がよくわかりますから、郵便や電信などによらないで、おたがひに通信ができるのでした。

冬になりますと、木精は木からうつゝて、地の下の穴の中に入るのです。何しろ、はれ／〃＼とした木の上から、じめ／＼して、きたならしい土の下に行くのですもの、大へんなちがひです。だから木精はだれもみな、春になるのを待ちどほしがつて、草が芽をふき、鳥がのどを鳴らして、春を知らせると、もう大よろこびなのです。

木精の国にはほかに動物はゐません。けれども虹猫は、古くから、この国に出入りして、おなじみですから、いつか雲の国に行つたと同様、かんげいされたのです。

木精は風がはりなたちで、人は人、自分は自分といふ風で、他の妖精を自分の国に住ませません。それだからといつて、別だん、他の妖精と喧嘩をするわけでもありません。いや／＼、かへつて、みんなと仲好くしてゐます。さうして、木精は、音楽をよくしますけれど、そのお

もな仕事は、妖精の着物をこしらへることなのです。

その着物といふのは、とても想像も及ばぬほど、小さな〳〵、微妙な織物で、いろ〳〵さま〴〵〳〵な、美しい、価のたかい材料で出来てゐるのです。たとへば、金蜘蛛、銀蜘蛛といふ、とくべつな蜘蛛の糸はもちろんのこと、その外に月の光り、蚕からとつた、それは〳〵柔かい生糸、魔術の井戸水にひたして色のさめないやうにした花びら、もうせん苔、水の泡、草の葉の筋など、そのほか、数かぎりのない材料が使はれるのです。

さて、この着物ができあがると、鳥がそれをもつて、妖精のところへ行き、代りの註文を受取ってくるのです。

ごくとくべつの場合には、註文をした妖精が寸法を合はせに来たり、服地やら、スタイルやらをえらびに、自分から出かけてくることもありますが、そんなことは、さう、たび〳〵ではありません。なぜかといふに、木精の縫つた服は、よくからだに合ひスタイルも見事だからです。

虹猫は木精の国に行くことが、大へん好きでした。

虹猫は、木精の国では、美しい、ぶなの木に住まつてゐました。朝日が、木の葉をとほして、射すときには、その小さなお家は、なんともいへない、可愛らしい薔薇色にそまつて、それは

きれいに見えるのです。毎朝、小さな鳥が声をそろへて、歌をうたつて、虹猫に聞かせ、又夕方になると、いつも子守歌をうたつて、すや〳〵ねむらせてくれます。

小さな鳥どもは、虹猫を、大へん立派な、きれいな人だと思つてゐました。そしてそれはじつさいのことです。

虹猫が、二三日、木精の国に滞在してゐるうちに、或日、朝早く、木精の頭が面会に来ました。それは大へんにこまつたことができたから、相談してみようと思つたのです。

困つたことゝは、ほかでもありません。妖精の国の女王様から、薔薇色をした短靴が幾ダースも幾ダースも、註文がありました。女王様は、こんどの宴会に、自分の御殿にゐるものには、みんなお揃ひで、薔薇色の短靴をはかせようと、思召したのです。それだのに、その宴会は、もうほんの三日の後に、迫つてゐました。

「やつてやれないことはないけれど。」と、木精の頭は言ひました。「材料をどうしたものだらうか。君も知つてゐるとほり、薔薇はまだ出ないし、石竹は近頃、むやみに註文があつたんで、すつかり使ひつくしてしまつたんだ。それに似寄りの染粉も、みんなになつてしまつたのだ。もう、薔薇色の革はちつとも持合せがないのに、すぐ取りかゝらなけりやならんのだ。そいつを造らせるうちには、日限が切れつちまふ。女王様のおきげんをそこねるのは恐しい、一たい、どうしたらいゝだらう。」

虹猫は智慧のある猫ですから、かう聞かれると、すぐいゝ考へがうかびました。

「それはどうも、お困りだらうね。」と、いつて、長いひげを二三度ひねりました。「むろんぼくは、喜んで、きみのお助けをしよう。もつとも、なか〳〵面倒なことだがね。」

「さうとも、なか〳〵面倒なので、ぼくはもう弱つてるんだ。」

「一たい、いつ頃までに、その材料が手にはいればいゝのかね。」

「どんなに遅くとも、今晩までに手に入らなけりやいけないのだ。」

「よし。できるだけのことを、やつてみよう。」と、虹猫は言ひました。「ぼくに二つの考へがある。まあ、そんなに心配し給ふな。今夜、こゝへ来給へ。ぼくがちやんとしておくから。」

木精の頭は、これですつかり安心して、帰りました。非常に火急な場合に、何か助けになることを考へてくれるといふのですから、虹猫が、大へんかしこい、深切なひとのやうに思はれました。

きつちり十二時に、虹猫は、その青黒い目玉をいき〳〵と、かゞやかしながら、木精の頭に会ひました。

「ぼく、二三ヶ所、心当りをさぐつてみたが、」と、虹猫はいひました。「もつとしつかり確かめなけりやいけないんだ。まあ、腰をかけて、ゆつくりと話すことにしよう。」

木精の頭はそは〳〵しながらも、いはれるとほりに腰をかけて、ねつ心に、虹猫の話すのを

待ちました。が、いよ〳〵、望みが多くなつてきたと思つて、喜びました。

「君に一つ、きくことがある。」と、虹猫は申しました。「馬追ひ谷のやぶ薔薇は大へんいぢ悪だつてことだが、ほんたうだらうか。」

「ほんたうとも。ほんたうとも。だれだつてあいつの傍に寄れはしないよ。ひどい奴さ。やぶ薔薇だつて中にはなか〳〵善いのもゐる。けれども、あいつはたまらない。ちつとでも、すきがありや、すぐ引つ掻くんだからね。それや悪いやつさ。」

「ぢや、も一つきくが」と、虹猫は言葉をつゞけました。「あの薔薇は、自分が、せいが低くつて、天までとゞくことができないので、それを大へん口惜しがつて、ひとをねたんでゐるつてことだが、ほんたうかい。」

「ほんたうだよ。いつもぶつ〳〵小言をいつたり、どなりちらしたり、近じよ近ぺん大迷惑なんだ。」

「ふむ。」といつて、虹猫は腕をくみ、しばらく何やら思案してゐました。

「やぶ薔薇の花びらで、妖精の靴がつくれるだらうか。」と、虹猫はしばらくしてから言ひだしました。

「きれいなのができるよ。でも、色が白だから使へないね。」

その時分には、やぶ薔薇は、妖精の国でも、ほかの国でも、みんな白ばかりだつたのです。

「まつたく、そのとほり。」と、虹猫はいひました。「ところでその白を赤にする工夫がある

んだよ。マンドリンを一ちやう貸してくれないか。」
「えゝ、貸さう。」と、木精は走つて帰りましたが、間もなく、銀や、象牙や、真珠貝などをちりばめた、美しいマンドリンを一ちやうもつて来ました。
「やあ、ありがたう。ぢや、三十分もしたら、君の入用な薔薇の花びらを、もつてくるから。」
虹猫はさういつて、マンドリンを首にかけ、いそいで森の方へ出て行きました。

ほどなく、虹猫は馬追ひ谷に来て、やぶ薔薇の爪がとゞかないくらゐのところに腰をおろし、マンドリンの調子を合せて、次のやうな歌をふし面白くうたひました。

かしの木は
天まで腕をのばす、
松の木は天まで頭をあげる
細い樺の木は
すつきりした貴婦人、
ポプラの姿のなよ〳〵しさ
だが一たい誰だらう?
そこの、ちつぽけな、

いぢ悪は
誰だらう、あゝ誰だらう？
そこの背のひくい変てこな木は？

虹猫が、これをうたひ終らないうちに、やぶ薔薇は、まつ赤になつて怒り出しました。立つてゐても、たまらなくなつたと見えて、体中を、ぶる〳〵ふるはせました。
虹猫はそつちへは目もくれないで、第二節をうたひました。

楡(にれ)の木は王様のやうに立派だ、
どろの葉は踊つたり、歌つたり、
ぶなの奥さん、きれいな奥さん、
栗(くり)の電燈はぴつかぴか、
だが一たい、誰だらう？
その膝(ひざ)までもとゞかない、
頭が白くて、足曲り、
一たいどうしたわけなんだらう？

歌がすゝむにつれて、やぶ薔薇はます〳〵怒りました。虹猫は、

「一たいどうしたわけなんだらう。」

と、おしまひをうたふ時には、ほんとにいゝ声でした。節も面白かつたのです。

けれども、やぶ薔薇の方では、そんなことに気がつきはしません。たゞもう、かん〳〵火のやうに怒るものですから、花びらはだん〳〵と石竹色になりました。あんまり身をふるはせるものですから、おしまひには花びらが、まるでうす紅の雨のやうに地に降りました。

虹猫はもう、ぐつ〳〵してはをりません。やつぱり歌のつゞきをうたひながらも足のつゞくかぎり早く〳〵木精の頭のところへ走つて行きました。そして入用な材料は、馬追ひ谷に行けばあると知らせました。

みんなが行つて、地におちたやぶ薔薇の花びらを寄せあつめて持つてかへりました。で、とう〳〵、女王様は、薔薇色の靴を御殿中のものにはかせることができ、虹猫は木精の国に、いつまでも好きなだけ、とゞまつておいでなさいといはれました。けれども、虹猫は、もつと旅がしたいからといつて、それをことわりました。

木精たちは、沢山お土産をくれましたけれど、虹猫はたゞそのうちから、魔術の井戸の水を

一びん貰ひました。この水は、一滴目につけると、石の壁をとほして、向うにあるものが見える便利なものです。又マンドリンはぜひもつていけといはれるので、これも貰つていきました。

やぶ薔薇はその後うす紅の花をさかせるやうになりました。

青空文庫情報

底本：「日本児童文学大系　第一一巻　楠山正雄　沖野岩三郎　宮原晃一郎集」ほるぷ出版
1978（昭和53）年11月30日初刷発行
初出：「赤い鳥」1927（昭和2）年3月
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：鈴木厚司
校正：noriko saito
2004年8月13日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

虹猫と木精

宮原晃一郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/